

---

# **エデムとORTが行く平行世界 第2弾 ~Rewrite 編~**

注ぎグチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HデムとORTが行く平行世界 第2弾 ↗ Rewrite 編

### 【Zコード】

Z6832V

### 【作者名】

注ぎグチ

### 【あらすじ】

この作品は、「HデムとORTが行く平行世界シリーズ」の第2弾です。

前作を読むことをお勧めします。ある日パチンコ屋に言った主人公はひょんなことからTYPE-MOONの世界に転生してしまいます。その後なんやかんやあってRewriteの世界へ！お供のORTと行くはちゃめちゃコメディです。主人公は最強オリ主チートです。

シリーズ第1弾はTYPE-MOON編ですが、第2弾はKey編についていきたいと考えています。

幕間1メートル 「キャラ設定」

注ぎグチの本気（前書き）

注ぎグチの本気をぶつかり堪能ください。

## 幕間1メートル 「キャラ設定」　注ぎグチの本気

どうも、注ぎグチです。

「HITEMとORTが行く平行世界 第1弾」お楽しみいただいているでしょうか？

ここまでを読んでいただいた方々に多大な感謝とお礼を申し上げます。

ありがとうございます。これからも誠心誠意込めまして執筆に励みたいと思います。

また、これからは注ぎグチの私生活の都合上、更新が遅れることがあると思います。それでも完走を目指して行きたいと思いますので、応援よろしくお願いします。

また、『希望の原作をシリーズ作品として執筆したいと思つております。

注ぎグチはできるだけ読者の皆様のニーズにお答えし、皆様との作品を作つてこきたいと思います。

注ぎグチは手遅れなオタクです。アニメ、漫画、小説、エロゲー、一般ゲーム、どのような原作が来ようとも対応していけます。

ぜひとも皆さんの意見をお聞かせください。続編は多かった原作作品か、注ぎグチのノリで決めたいと思います。

選ばれなかつた原作も続編または番外という形で取り上げていくことをお約束します。

現在のシリーズもので型月とKeyのRewriteを書いております。

たくさんのご意見・希望をお待ちしております。

さて、挨拶は此処までとして・・・

さてさて、そろそろキャラ設定の方を出さないと私の非才な文からでは主人公たちの想像が難しいかと存じます。

そこで・・・・ん~なんと!

「Jの私こと注ぎグチが本作の主人公「アド・エーテム」とヒロイン！？「ORT」さんの“イラスト！！”を本気を出して書いて参りました！！！！！！

ふふふつ実は注ぎグチ・・・ある時は理系大学生・・・またある時は就職難民・・・またある時は「此ノ110」の作者・・・・。・その正体は！！・・コミケにも参加している「イラストレーター」なのです！！

・・・

・・・あ、どうでもいいですよね（泣）

『意見・感想もお待ちしております。

イラストについて一言くれるとうれしいです。

それではキャラクター紹介の方へどうぞ！

本作の主人公。髪は薄いピンク色をしている。瞳は青い。おっちゃんのおかげでイケメン。

アド・ヒテム

> i 2 8 9 0 0 — 3 7 2 4 <

/

/

身長176cm 体重65? 血液型不明。

趣味は睡眠、パチンコ。好きなものは博打、幼女、睡眠。嫌いなものはキノコ、生魚。

将来の夢はハーレム! 「エテム? 「ヒツ! ?お落ち着けオルト! これは! 」問答無用・・バギゴギガガギゴ「ギャアア～～～！」

性格はのんびり屋。基本は平穏を目指して行動している。時たま邪氣眼が発動する。眼帯など。後はロリコン疑惑がある。

身体能力は核弾頭並み。Fat eのサーヴァントが戦闘機と例えられている。戦闘機は給油などが必要だけど、核弾頭は発射さればどうしようもない。

現在、「ORT」と「魔剣・斬撃皇帝」と一体化しています。自らが剣であるため「虚刀流でもはじめるか・・・」つと思つてている今日この頃。

根源としては「世界の樹形図」。それが能力にも影響を与えている。

イラストのモデルは「IS インフィニット・ストラトス ラウラ」です。

・能力・スキル

筋力 EX

魔力

耐久 EX

幸運

敏捷 EX

宝具 EX

### 「魔剣・斬撃皇帝」

対象の大きさに合わせて刀身を増大させるだけの単純な魔剣。その本質はあらゆる可能性を内包した樹形図より対象を確実に斬り裂く因子を要素となる因子を持つてくること。

現在は体そのものが魔剣であるため、好きな形態、で好きなように出せるが黒色がデフォ。

現在、猛練習の末にセイバー・オルタの黒いエクスカリバーを完璧に模倣することができ、通常開眼のデフォとなっている。

### 「肩の力を抜く程度の能力」

おっちゃんにもらつた能力。どんな所でもリラックスする（させること）ことができる。その本質は樹形図より最適な事象を選択・書き換えること。

普段は睡眠のため意外使っていない。子供をあやすときとかに便利。

### 「ムツゴ ウ王国」

そのままの能力。自分以外の種族と心を通わせることができる。

### 「魔眼・侵食結界・水晶渓谷」

ORTが持つている能力。一体化したことにより使用可能になった。使用中は左目から炎結晶が噴き出してくるため、一応は魔眼といふ扱い。普段、眼帯をつけているのは「なんかカッ」「よくねえ?」つとのこと。イラストにもその様子が描いてある。

## オルト

× 28901 — 3724 ×

本作のヒロイン。髪は黄緑と青のメッシュ。瞳は翡翠色。頑張つて見て中学生くらいの幼いゲッフングッフン・・・少女。

身長133cm 体重33? 3サイズ65・47・62 血液  
型不明

モデルとなつたのキャラに体格が似ている。ただし、それよりも少しだけ身体的スペックが高いのが密かな自慢「なにか（笑）？」。  
・・・いえ、ごめんなさい。

その正体は死徒二十七祖の五位。水星のアルティミシット・ワンであるが、5000年ほど前に地球上に到着してしまったドジつ娘。全長40メートルほどの宇宙生物。外見は巨大な蜘蛛に酷似する。

単純に実力でいえば現在世界最強。地球で戦う限り弱点は無いとされる。死の概念がないため直死の魔眼でも殺すことはできず、物理的に破壊するしかない。

地上のいかなる材質よりも硬く、柔らかで、気温差に耐え、鋭いという外皮に覆われている。

趣味はエテムといふこと。好きなものはエテム。嫌いなものはエデム以外

将来の夢はお嫁さん！

性格はモーテルのキャラに似ているがシンガーテレ8%くらいの割合。という感じ。最近人間に触れてきて感情を見せるようになってきた。というか口がうまくなってきてる。エデムの財布を「あら？ あなたのような甲斐性なしに財布なんて持たせられないでしょ？ 私がしつかり管理してあげる」と言つて紐を握つて。ヤンデレ

エデムが「始めて会った頃のオルトは見た目通りの子供だったのに・・・」と育て方を間違えたと嘆いていた。

最近は料理を勉強しているが、あまり進歩していない。しかし、エデムのお嫁さん「べ、別にそ、そんな／＼・・・ブツブツ」になるため花嫁修業中。

現在はアド・エデムと融合したため、斬撃皇帝とも融合したことになっている。

そのため、アド・エデムの根源の投影といつても粗食ない関係になつていて。

普段はエデムの影の中で過ごしている。

エデムの許可によりOORTへの変身も可能。

イラストのモーテルは「MELTY BLOOD 白レン」です。

・能力・スキル

筋力	EX
魔力	
耐久	EX
幸運	B
敏捷	EX
道具	A+

### 「侵食結界・水晶渓谷」

侵食固有結界一（固有結界に似た能力）『水晶渓谷』を数千年にわたり展開しているという。水晶渓谷は彼女が存在するだけでそこを彼女の住んでいた環境に変化させるというものであり、要するに異界秩序による地球の物理法則の改竄である。炎がふてた所はたちまち結晶化する。この炎を炎結晶といつ。

## 幕間1メートル 「キャラ設定」　注ぎグチの本気（後書き）

どうでしたか？

注ぎグチの画力は？皆様のイメージとは違っていたかもしません。

今後も要望があるようなら、オルトちゃんの水着やサンタ姿など季節イベントにてござって行きたいと思います。

「意見・感想お待ちしております。」

## 001メートル やつてまいりましたRewrite（前書き）

以前は「此ノ樹の110メートル」という作品の続編として書かせていただいておりましたが、多数の世界を同じ作品に閉じ込めてしまって原作を知らない人が嫌がつてしまつと友人から指摘を受け、このたびシリーズものとして分けさせていただくことになりました。

前作から「J愛読くださいました皆様には深くお詫び申し上げます。

それでは此ノ樹の110メートル改め・・・ヒデムとORTが行く平行世界シリーズ第2弾 Rewrite 編をお楽しみください。

## 001メートル やつてまいりましたRewrite

世界を移動する。

樹形図を逆走し下へ下へと辿りついでいく。

脳裏に掠める星の記憶。

幾千幾万と繰り返されてきた生命の営み。

回って、回って、回り疲れて。

息苦しくなつて、それでも世界は廻り続けた。

その結果世界は死に、生命が息絶える。

鋼の大地へと変わってしまった。

そんな世界の未来を救つてきた。

なら・・・・・・・・・・・・

次は・・・・・・・・・・・

過去を・・・・・

・・・救うんだ。

そして俺たちは「根」へと落ちてこく・・・・・

緑化都市「風祭市」

造られた緑の町。

町の中に緑がある町。

バスに揺られながら窓の外に田を向ける。

プロロゴ

/

「・・・やつと、JJまで来たか」

この世界・・・「Rewrite」に来て3年も経ってしまった。

あの鋼の世界に通じる可能性の大きい世界。

そこに俺とオルトは舞い降りた。

俺たちは世界各国を旅してきた。

ブラジルから始まりアルゼンチン、ボリビア、メキシコ、アメリカ、カナダ、船に乗り、イギリス、フランス、スペイン、南へ下り、アルジェリア、アラブ、スーダン、コンゴ、ザンビア、タンザニア、ケニア、エチオピア、サウジアラビア、イラン、カザフスタン、ロシア、中国。

世界が終わる予兆を探して・・・

そして今、日本へやつてきた。

そしてこの世界が「Rewrite」だと気が付いたのは最近のこと。

ロシア旅行中に森で黒犬の魔物6匹が襲つてきたので1匹をグシャツと潰し、残りも潰そつと思つたときにガーディアン乱入。

そしてその人達と会話した結果、判明した。

「 ジジ、 Rewriteじゃん・・・」

俺、まだ全部終わってねえし・・・Terrarouteの最後の方だけ見てねえ。

最後に見たのは篝を匿つあたりまでだつた。

正直今が原作のいつ何時なのかわからない。

その確認の意も込めて俺はロシアで書いてもらつた紹介状をもつて、ガーディアン日本風祭市司令部に入隊希望をきたわけです。

「 ここの町はずいぶん綺麗ねえ。あ、見て見て！ あそこにケーキ屋さんがある！」

今度、買つてやるから静かにしてなさい。

「 はいはい。で？ 後どれくらい？」

「 次で降つると書いてある」

オルトが俺の持つている地図とメモの書かれた紙を覗いてくる。

ORT改めオルトは「」の3年間で、たくましく成長した。・・・内面だけ。

最初は本当に子供だったけど、俺の能力に影響されて環境に最適化していった。

その結果。

「ちよっと、なにアホ面してんの？あ、ネクタイ曲がってる。直してあげる」

「・・・あんがと」

「うへんと、じりじりて・・・じつかを下に・・・ギュウ・・・あれ？」

「げつ・・・・・く・・・・・び・・・首が」

タップタップー決まりますよー！オルトもん、首決めちやつてますよー！

「！」、「めんー！」

ご覧いただけただろうか。

すっかり世話焼き女房よりじくの女子元育ちました。ありがとうございます。

正直、最近はドキッときせらわれる」とがよくあります。仕草などが

どこのか色っぽく感じられます。

この間なんか、「これであの人もメロメロ～惱殺編～」とかいう本を読んでいた。ちなみにフランス語だったw

俺はロリコンじゃない俺はロリコンじゃない俺はロリコンじゃない俺はロリコンじゃない

ほんと勘弁してください。

#### 閑話休題

「危づくおっちゃんのところに行くところだった（汗）

「・・・」めん（シユンツ）

とりあえず、頭を撫でておく。いつもすると大抵元気になるところはまだまだ子供だ。

「次からは頼むよ」

「あ、うん！」

その笑顔につられて俺も自然と笑顔になる。

ヒソヒソ

外人さんかしら?

あらあら、微笑ましいわね~

兄弟かしら?

違つんじやない?

あらやだ! もしかしてロリコン?~

バスの乗客の皆さんとの視線を独占! イエーイ! ~

・・・死にたい。

そんな平日の昼下がり、バスに揺られてガーディアン日本風祭市司令部へ向かつた。

/

/

/

「え、わざわざ？」アド・ヒトム改め立花七瀬です。

一応、この世界ではこの名前を名乗っています。苗字は生前の橘の字違いで名前はオルトが付けた。

理由を聞くと、「髪が山に咲く桜のよつなどから……あと女顔（ボソツ）」と答えた。

そのオルトは現在俺の影の中でP-Pをやつしる」とだんだん。かくいう俺は何をしてるかといつと……

「……………ぐ――――――――」

「おいつ立花！走りながら寝てんじゃねえ！」

「……んあ？……はいはい、おきてますよ」

「」「」「嘘つけ……」「」「」

訓練所にいる40数名の訓練生や教官からシッパミが入る。

「西九条！」の馬鹿を端つけて連れてけ！」

教官の清水が叫ぶ。

「は、はいーほり、わたくと来なれー！」

「んあ？・・・べーーーンணণ」

「起きたー。」

頭をひつぱたかれる。

「ん？・・・何だ西九条か・・・いつもすまんね」

「もう思うのなら真面目に訓練しなさい。私はあんたなんかに構つてられない。もっと上に行かなきゃいけないの・・・」

どうせこいつは焦つてるようだ。

「まあまあ、餡でも食つか？」

俺の「肩の力を抜く程度の能力」さんは常時発動なのです。

そんな俺を見てため息をつく。

「はあ～あんた見てるとなんか馬鹿らしくなつてくるわ・・・」

そういうながらも壁に寄りかかって座る俺の隣に座る。

「悩み事なんてのは悩んでも解決しないのが、バカやつて放り出すのがオレ流。そうすると不思議と解決してくるもんさね」

「ホント、お氣楽でいいね、あんた」

ふふふふと笑みをこぼす西九条。ここに着てから四六時中居眠りし

ている俺の世話係りになつていてる少女。

どうやら今は原作で書かれてるアルートの序盤、過去編といつやつらじこ。

今宮も瑚太郎も向こうで何か言い争つている。

モウシテモウシテうちに清水教官が集合をかける。

「さて・・・これからどうなることやら」

/

「それではこれより対魔物を想定した訓練を開始する」

「チームは5人一組だ。それぞれ順位ごとに分かれろ」

俺のチームは今宮、西九条、長居、瑚太郎、俺のワーストチーム。  
ドベ5人。

え？なぜお前がそここいつ？めんべくかつたからに決まってんじ  
やん』

俺も瑚太郎と同じで最初は期待されていたらし。

どうやらロシアで紹介状書いてくれたおっちゃんがなかなかす』い  
人だつたらし。そのおかげでロシアの新星と今宮にはやし立て  
れた。

まあ、力加減がめんべくなくて最強か雑魚の一択だつたから雑魚選  
んだだけなのですが・・・

それに清水教官が好きにやれつていつてたし。

「だあー・またこのメンバーかよ！？」

今宮が絶叫している。

あまりのヒスつぶりに声をかける。

「はは、ズンマイ！」

「おめえ～りの」とだよーおめえーと天王寺のズベコンビだよー。」

「いやー照れますねコタさんや？」

「え、いや俺は別に・・・」

瑚太郎は今宮の物言にこうんざつ氣味らし。

「ほめてねえーよー。」

「・・・ふー。」

「・・・。」

そのやり取りに西九条はため息、長畠は無言で見ていた。

今回はビルに立てこもった獅子舞型の魔物を、チームで駆除すると  
いう筋書きだ。

冗談めいたノリに、皆気分をゆるめ、最初のチームがビルの中へ入  
つっていく。

「まあ、今日は楽勝じゃね？ 獅子舞つてハンデも立つたようなも  
んだべ？」

今富がこうじともわかる。それに對してほかのメンバーも氣をゆる  
めてるようだ。

「・・・やつとは思えないけど」

「ほりほり。その心は？」

珍しく瑚太郎が発言する。そこにオレがすかさず口の手を入れる。

「・・・いや」

しかし、それに答えない。そんな瑚太郎に皆がイリツベ。

「あんたのやうごうといふかつく・・・」

「言いたいことがあるなら、聞いてみたら?」

「言えよ。聞いてやる。」

「・・・」

やつこわれてやつと話しだす。

「あの獅子舞、教官たちの動きは制限されるだらうナビ、その分、本気は度してくると思つ。」

「えりこしてやつゆつの?」

「あのサイズの魔物つて半端じゃない。虎の魔物がいたとしたら、そいつは実際の虎より強いよ。・・・俺たちにそのことを指導しうとしてるなら、ヤバイと思つよ。この訓練」

「確かに一理あるね」

西九条は顎に手を当けて考へ始める。

「勇者様の『慧眼はさすがつすね』。雑魚じゃなければ」

ガツシャン!

その時、ビルの窓ガラスが割れて誰かが落ちてきた。

今の訓練を受けている班のひとりだ。

入って3分も経っていない。

「痛そうだね・・・」

俺のその言葉にチームメイトは押し黙っているだけだった。

結果はいうまでもなく惨敗。全員が死亡判定。俺?おれは入って20秒で死亡``

チームメンバーもおのれの楽しんでいるようだ。

訓練生最後の日はささやかな宴が開かれた。

これで晴れて実践にいけるわけですね。

基礎訓練課程、修了。

/

/

今宮なんかは友人たちと騒いでいるようだ。

瑚太郎は江坂さんとにかく語り話している。邪魔しちゃいけねーな。

長居はガーディアンをやめてしまった。

西九条はと・・・

・・・なんかものすゞい集られてる。どうやらナンパされてくるようだ。わかりやすい可愛さの西九条は声をかけまくられるようだ。

なんだか卒業式に先輩に告白する下級生みたいで笑えてくるw

ずっと見ていると田が合い「助けなさい!」っと訴えかけてくるのを無視し続けていた。

「あ、あの立花さん!」

「んお?」

なんか声かけられた。確か・・・・忘了。卒業生Aとじょ。

「なんだ卒業生A?」

「ほ、僕と付き合つてくださいー。」

・・・・はい?

「はじめて見たときから好きでした！」

いやいや、意味わからん。男に告白されて何が面白い。

「までー。」

おー一名も知らぬ卒業生B助けてくれるのかー！

「ずるいぞー俺も立花さんが好きなんだ！」

えー

その後、「俺も俺も」と会場は大混乱。西九条派と立花派が一触即発。

・・・全員沈めといた。

全員正座させ、オレが男であることを説明してやつて。ほとんどががっかりと肩を落としていたが、何人かが「はーはーはー」言つていたので壁に埋めといた。

西九条はそんな俺を見て爆笑していた。

・・・・・

ういすじくへ・・・

つ・づ・け・る?

001メートル やってまいりました Rewrite（後書き）

これからもよろしくお願いいたします。

## 〇〇メートル セレブリティツアーハウス（前編）

「ここには注視グチでいることがあります。

このたびはシリーズものになつましたので、ガンガン投稿させいた  
だく所存でござります。

皆様とは何をおしゃべりになることを心より望んでおります。

それでは、本編をどうぞ。

## 〇〇2メートル セレナとセリフ

ブロロロ~

江坂さんの車で瑚太郎と今宮、西九条と一緒に風祭市に送つてもらつた。

「いや~、すんません。俺まで送つてもらひちゃつて

「なに、気にするな。それでは三日後九時、本部に出頭するよ」

江坂さんの車は俺と瑚太郎を駅前で降ろし今宮、西九条を乗せたまま走り去つていった。

「さてどうしようか? 「タさんは偽名なんだつた? 俺は田中太郎だつた!」

「俺は風祭 凡人・・・」

「・・・大丈夫なのかな?」

「さあ?」

こんな偽名で大丈夫なのかな? 応書類上は問題なさうだからいいか。

「んじや、また三日後にな立花」

そつこつて瑚太郎は町並みに消えていった。

ふむっ、俺も寝床の準備しなくちゃいけないな。一応、支度金としてそれなりの額は渡されている。

「狭い部屋はこやよ？」

「さうと影からオルトが出てくる。

おまつ、誰かに見られたら大変だろ？」

「・・・つへん」

ここ数年ずっとほどんど影の中に入れていたことに腹を立てているのだひづ。

「影ん中に押し込めてたのは悪かつたよ。でも、おまえはこの世界では魔物みたいなものだろ？ 鍵と間違えられでもしたら大変だぞ？」

「ヤツちやえばこいんじやない？」

「なんと物騒な」と叫んでしょいのナ・・・

「それはだめって、ゆーたやんけ

「・・・・・ハイ！」

機嫌悪そつこそつぽ向いてしまつ。

「……わかったわかった。今日一皿ついでに聞くから許してくれ

「……何でもっ。」

「お、もつー息だな。ふつ、ちゅうこものだ(一)ヤ

「ああ、何でもいいと聞こせやんよ」

「……じゃあ、手繋いで」

「はこはこ。仰せのまま」  
そうこつて手を差し伸ばしてくる。その顔は薄く赤に染まっていた。

傳きながら差し出された手を握る。

「それとケーキが食べたい」

「んじや、まずはケーキ屋からだな」

そして俺たちも並みの中に消えていく。

/

三日後、本部に顔を出す。

ガーディアンの目的である。「鍵」の破壊について説明された。

「鍵」とは敵対組織「ガイア」にとつて救済と呼ばれているそうだ。その正体は現在の文明を滅ぼし、再び、新たな知性ある生命を誕生させるリセットボタンである。

ガーディアンは鍵を破壊し滅びを阻止することが目的だ。

超人的な能力を持つたガーディアン、魔物を使う魔物使いがいるガイア。この世界ではこの二つが争っている。片や人類を守る者達。片や世界の滅びを望む者達。

鍵自体には人類を滅ぼす意思はなく、生理現象のように地球上の生命を滅ぼすものだ。

むしろ、滅びを止めようとしている。

それは、星が新たな生命を生み出すほど力が無くなつてきているからである。すでにターニングポイントは過ぎてしまった。  
そのため、たとえ人類を滅ぼしても星は再生しない。

滅びを止めるには、どうしたら「立花、大丈夫？顔色が悪いよ？」

西九条が俺に声をかける。

顔を上げると、今富、瑚太郎、清水教官、江坂さんなどがこちらを見ていた。

今は、風祭で行われる「収穫祭」期間の持ち場の振り分け中だった。

「どうしたのお姫様？　あ、わかつた！あの日だ「ツップグラー！」

とつあえずつるせこ今富は沈めておく。

「どうした気分でも悪いのか？顔が青いぞ」

江坂さんも心配してくれる。

「あはは、大丈夫です。朝食を食べ過ぎて気持ち悪いだけですから」

「それならいいが、無理はするなよ」

「うひ～っす

/

「 そんで俺らは割り振られた管轄でモニター……つまり監視要員としてきてるわけなんだけど……」

「 ねついや、お前ら何ができるの?」

唐突に聞いてきた。

「 俺は、止血が早かつたり、持久力を上げたり……」

「 汚染系は戦闘向きじゃねえーな」

瑚太郎が今宮と話している。

能力は3つの分野に分けることができる。

追跡や罠など狩りの本能を特化させた「狩獵系」、切断に特化した「伐採系」、特殊な物質などを体内外で生産する「汚染系」。

ちなみに、今宮も西九条も狩獵系である。

「 立花は?」

とか西九条が聞いてくる。まあ、隠すこともないし……

「 えーと、どんなものでも斬れます。」

つっても、斬撃皇帝は開眼できないんだけどね。

斬撃皇帝を開眼するにはジンが必要なのよ。ジンは機能をなくした

星にあふれだしたあらゆる有害。それがこの生きた星はない。量子変換でもできるけど、テフオのエクスカリバー型を作るのに東京ドームくらいの面積の地面が無くなる。一応、変換したもの貯めておけるが、毎日ちょっとずつやっても割に合わない。

今現在で貯まっているのナイフ程度の大きさだ。

まあ、それだけあれば死徒の一體くらい切り裂けるけど。

ま、そんなの使うより、体そのものが魔剣なわけだから、手刀ですぱーつといけます。訓練所ではひたすら虚刀流の真似事してましたから（キリッ

その辺はそのうち何とかなると思つ。アテがあるからな・・・

「伐採系だったのお前？ そんなとこ見たことないっしょ」

「いや、見せたことないもん・・・それと汚染系。周囲の侵食・・・わかりやすく言つと物質を結晶化させて水晶にしたり、それで作った槍とか飛ばして攻撃できる。有効範囲は目の届く範囲くらいかな？ それ以上は試したことないからわからん。たぶん狩猟系はないと思つけど・・・」

「・・・・はあ？」

なんか皆面白い顔してる。

「お、おま、レアな能力2種類持ち、通称ダブルホルダーだつていのつか！？」

「おひ

説明口調乙 w

「お前、激レアじやん！ 何で言わねえーのよ！？ え、何？それ  
じやあお前、本当にロシアの期待の新星だったの？ こんな近く  
にのし上がるチャンスがいたのか――！？」

なんか今富がつるせえー。

西九条と瑚太郎はいまだフリーーズ中 w

まづいのか？

「そりゃー、今まで落ちこぼれだと思っていたのが本当に期待の新  
星だったら・・・ねえ」

あ、オルトさんちーっす。

オルトとはテレパシー的なもので会話ができる。

「・・・あー」

「今度はなによ？」

「あと、テレパシー的な」ともできる。「これって狩獵系かな？」

「・・・・・・・・・・」

フリーーズ再び w

「Hデム・・・あんたわかつてやつてるでしょ？」

わかる？』

「立花つてすゞ」こやつだつたんだな。最初は眼帯つけてるからただの痛い人かと思つてたよ」

「タさんや・・・そいつは言わない約束だぜ・・・

「ダブルでもレアなのに、トリプルつて・・・

おーい、西九条かえつて來い。

「いやまてよ。・・・」こんな逸材がわざわざワーストチームに残つてくれていて、あまつせぐ今は実践でチームを組んでいる・・・  
俺勝ち組じやねえ？」

おーい、全部聞こえてんぞ。

ガシツ！

急に今西に肩を掴まれた。

「立花さん、これからは仲良くなれ！」

「・・・・・今宮キモッ！」

おつひと、本音が『

んで、持ち場に着いた。

森と町を結ぶ最短ルートの一つ。しかも比較的人通りも少ない。

ガイアの魔物使いや一般人が森へ行かないようにするのが俺たちの役目である。

その中でも優先度が低いポイントの一つがココであり、今宮はそれが不服らしい。

ん?なんか森のほうが騒がしいな。

その時、森の奥から笛の音が響いた。超人的な聴力を持つ俺たちにしか聞き取れない波長。

「・・・緊急シグナルだな」

急いで、皆のところに行くとなにか揉めている所のようだ。

「何してんのさ君ら・・・」

「立花お前も行こうぜ。もう力を隠すこったあねえー。上にのじ上がろうぜ! 先行くからな」

そう言つて森のほうに駆けていく。

「西九条お前も命令違反か？」

瑚太郎が問いかける。

「・・・上に行かなきゃ、いつまでも息の詰まつたままだから  
そういうて行つてしまつた。

「立花はどうする？」

どうしたものか、正直に言つと原作知識もだいぶ霞がかかつてしまつている。

死なれても田覚め悪いし・・・

「どうしたの？助けないの？」

そうだな・・・そうだよな・・・

「連れ戻してくる・・・瑚太郎はココについてくれ」

そういう残して、俺は2人の後を追つう。

俺の身体能力なら追いつける。

2人は森のすいぶん奥で見つかった。

どうやら、7匹の魔物と交戦中のようだ。

黒い犬。ハウンドタイプと言われる量産型の魔物だ。

その一匹が西九条の背後から襲いかかろうとしている。今富は自分  
のことに精一杯で気づいてない。

「ちつ」

背後から襲い掛かる魔物に上から水晶の槍を投げ地面に縫い付け、  
地面に着地する。

「え？」

地面をなめるように駆け抜ける。

通り過ぎざまに西九条と今富に群がる魔物の首を手刀で切り落とす。

「立花！」

2人が驚いている。

「説教は後だ。町まで撤退するぞ！」

最後に地面に縫い付けたやつの首を刎ね、森の外へ向かう。

「・・・お前めつけや強いじゃん。なんで隠してたんだよ?」

「隠してないよ。聞かれなかつたし、見せるとも言われなかつた」と今富が眞まづりに話しかけてきた。

「その・・・すまなかつたな、今まで・・・」

それはあつと心からの声なのだろう。だから俺もそれに答へなくつちやいけない。

「今富キモツー!」

「何だよ!人が折角あやまつてんのこー元

しまつた。ついつい。

「いやーねえ?今まで通りでいいよ?じゃないといつちが調子狂うし。」

「はあ~。なんで」んなやつが強いんだか・・・

む、じんなとはなんだ。」んなイケ面つかまえて。

「ま、戻つたら瑚太郎とも仲良くなれるよ。これは命令だ

「・・・わあーつたよ。善処いたします」

よしよし。

「西九条もな。仲良くすんだぞ」

「……はあ。わかつたわよ」

よし、そんじゃ もう あと町に「H[テム]ー」！？

「止まれ」

「どうしたの？」

「……囲まれた。数は30。どれもハウンドタイプだ」

「な、30！？30つったか！？」

「ああ」

周りは完全に魔物に取り囲まれている。1人なら軽く跳んで逃げる  
か、懲滅だが……

先ほどの魔物のマスターが仲間を集めめたか……

「う、嘘……」んなに

「まじか……」

顔を真っ青にしている2人。

「仕方ない……」

オルト、力借りるぞ。

「はいはい、エーテムは私がいないと駄目ね」

・・・最近は家事全般を任してるので反論できねえ！

「お前ら伏せろ」

/

（西九条 s.i.d.e）

「お前ら伏せてろ」

立花がそういって左目の眼帯を外した。

立花の右目は青い。しかし外された左目は緑・・・いや、翡翠色。

立花の足元から広がっていく。

その炎に触れたものはたちまち水晶になつていく。

でも、私と今宮には影響がないようだ。

あたり一面が水晶の世界と化す。

立花は翡翠の目であたりを見渡す。

その動作に魔物たちが一斉に襲い掛かつてくる。

私は、不思議と怖くなかった・・・

いや、私は目が離せなかつただけだ。

そのきれいな左目に・・・・

次の瞬間

魔物は地面から突き出した水晶の槍に串刺しにされていた。

ありえねえ。

30体もいた魔物が一瞬で串刺しにされていた。

俺たちでは7体を相手するのも無理なのに、1人で30体。まだ、死に切れていないのか抜け出そうとしている。

しかし、立花はそんなのは気にしないあたりを見渡す。

そして、水晶の槍を作ると森の闇に向かって投げる。

遠くから断末魔が聞こえてきた。

すると、まだ生きていた魔物も塵となつて消えていった。

俺たちは、ただただその光景を目に焼き付けるだけだった。

続きますよ。

## 002メートル セレナとセリーヌ（後編）

どうでしたか？

楽しんでいただけたら幸いです。

次回は主人公のまさかのカミングアウト！

ご意見・感想お待ちしております。

〇〇三メートル　自重しませんよ♪（前書き）

またまた、注音口です。

皆さん、11の夏をどうお過ごしですか？

私は、小説投稿で現実逃避の毎日・・・・

れでー。それでは本編をお楽しみくださいー！

## 〇〇三メートル　自重しませんよ

「ばか者！　持ち場を離れるとは何事だ！」

今宮、西九条が頬を張られた。

清水教官はだいぶお冠のようだ。

あの様子では説教は長くなりそうだ。

「お前もだぞ立花。連れ戻すためとはいえ、持ち場を離れるのは褒められん」

「すいません」

江坂さんに叱られてしました。

ショボーン

「お前らの報告書は見させてもらつた。たまたま田撃していた別の班との報告とも一致している」

「はあーそつですか

「・・・・しかしわからん。なぜ力を隠していた？能力はともかく身体能力まで・・・その力なら同期・・・いや、全ガーディアンの

中ですらお前に匹敵する者はこなこ皿つの……何故だ？

なぜって……

「今頃とも同じこといつたんですけど……聞かれなかつたし、見せろとも言われませんでしたから」

「…………お前はロシアの司令部の推薦状でロロに来たのだったな？」

「はい」

「それ以前の経歴は一切わからないと資料に書いてある。以前は何をしていた？・・・貴様は何者だ？目的は何だ？」

なんかめっちゃくちゃ睨まれてます（ガクブル

〔話せることだけ話して、適当に誤魔化しておいたら？〕

「そうだな、話せるとこだけ話すと……」

「俺はこの時代の人間ではありません。ここから少し未来の地球。滅びてしまった鋼の大地から来ました。俺はそこで魔物と戦う騎士というものでした。目的は世界の死を食い止めることです」

〔何言つちやてんの〕の馬鹿は~~~~~！？」

「しゃべれる範囲でかすぎるのよ~~~~~！ばかばかアホ~~~~~！

え？ だつて聞いてきたからしゃべれる範囲で答えたのよ？」

！」

さつきまでの殺氣立つた顔とは打って変わつてぽかんとしている  
ナイスミドル江坂さん。

「・・・それは本当なのか？」

「はい」

「世界は滅びてしまうのか？」

「はい。しかし人類は生き残ります。環境に対応できなくつて多くの人が死にました。でも、突然変異と遺伝子操作により環境に耐えられる自分のような新人類が誕生しました。俺のいた時代には旧人類の生き残りは一人だけでした。安全の保障をしてくれるのなら、体を調べてもらつも構いません。俺のソレはあなた方とは違うと思います」

「「「「「・・・・・」」」」

気が付くと司令室にいた者、全員が俺のほうを見ている。その中には今宮と西九条もいた。

長い沈黙。それはそうだ、人類を守るガーディアンに人類は滅びると言つてゐるようなものだ。

「・・・わかった。君の安全と自由は私が保証する。すぐに検査してもらいたい」

「わかりました」

江坂さんはうなずくとビームに連絡を取った。

「では、いらっしゃだ

/

「信じられません。彼は特殊な環境を生き残るためにまったく新しい器官を持つています。おそらくこれは摂取した有毒物質を分解するものだと思われます。しかしこの時代では不必要なものなのでしょう。活動している様子がありません。血中の赤血球を見てください。このような形のものは見たことありません。また、身体能力も筋肉の構成から我々のものとは違います。まるで魔物だ」

「彼は魔物なのか?」

「いえ、それはありません。念のため検査しましたが反応は見られませんでした。・・・彼の言つてのように新人類と言うのが正解なのでしょう・・・」

「もついいですか?」

診察台から降りながら江坂さんたちに声をかける。

「・・・ああ、君の言ひ通りだ。君は我々とは違ひよつだ」

ふつと江坂さんが笑みをこぼす。

「・・・・ふふふあ～ははははあ～！」

突然の大笑いに医療スタッフも俺もぽか～んとしてしまった。

「君は物好きな男だな。世界を救うためにこんなところまで来て。相当なお人よしだよ」

「え？ 信じるんですか？」

まさかそんな簡単に信じてもらえると思つていなかつた。

「ふふふ、だつてお前は私の「なぜ力を隠すのか」という質問に「聞かれなかつたから」と答えた。ならば聞いてみようと、私はお前に「何者だ」と質問したんだ。そしたらお前は「未来人」と答えた。あまつさえ、検査結果が物語ついている。それだけで十分だ」

さすが江坂さん。見た目も中身もナイスミドルなだけあるな。

「ホント、どうなることかと思つたわよ・・・」

すまんすまん。めんべくへくなつたから早めに打ち明けたかつたんだよ。

そこにあの質問でしょ？しゃべつちやつたw

「・・・あとでお仕置きね」

「ちょっと！勘弁してつかさい！」

「「」のことは秘密にしとくべきでは？」

ドクターがそう言つてくれるが、

「今更遅いですよ。検査結果が出た時点で本部の全員に知れ渡つて  
るだろ？」「」

「ふむ、人の口には立てられんか・・・・」

江坂さんが少し考え、口を開く。

「パスポートは持つているか？」

「え？一応支給された物の中にはありますけど・・・・」

「よし、立花！ヴァチカンに飛びぞ！これから貴様には救世主とな  
つてもうひとつ。この時代に来たのだその覚悟はあるはずだ」「

「はい？」

そして俺はガーディアンの総本山であるヴァチカンにとんだ。

後から聞いた話だと、瑚太郎は俺たちを追い、森に入ったところ魔

物に襲われたのか傷は塞がつたものの意識不明の重体だそうだ。脳にダメージを受けているらしい。

今富も西九条もそのことを思い悩んでいたと江坂さんから聞かされた。

まさかTerratorialじゃないとは思わなかつた。おそらく、森に入る朱音をみてそれを追い、木から落ちるところを救つて怪我をしたのだろう。その後小鳥と篭のおかげで助かつたのだろう。

原作開始まで後9年

ヴァチカンに飛んだ俺と江坂さんはなにやら偉そうな人の前にだされ、いろいろ質問された。

面倒だからこのときにオルトも紹介した。

その時、魔物使いとして疑われそうになりたり（ある意味あつてゐる）、キレたオルトがORT化したりといろいろあつた。

突然目の前に体長40メートルのスペーススパイダーが現れたときの人の表情見たことあるか？

めっちゃ笑えるぜw

今は問題なく受け入れられている。

けつして、触らぬ神に祟り無しの精神ではないと思いたい。

その後、俺たちはいろんな機関で検査を受けた。どれも同じ結果しか得られないだろう。

そつそく、千年後の世界に人類を送り込むために多くの子供たちを犠牲にした馬鹿げたプロジェクトがあった。

そう、原作キャラのルチアがいた場所だ。

ルチアはそんなプロジェクトの唯一の成功者だった。

その体は存在するだけで、千年後の世界・・・鋼の大地を再現します。

彼女は人と触れ合うことができない。花を愛でることができない。子犬と遊ぶことができない。

触れるだけで殺してしまっから。

そこで俺の出番なわけですよ。

「3年ぶりだな？元気してた？」

「ええ。そういうあなたは相変わらずむちゅやけやしてるのね」

3年ぶりに西九条に会った。・・・といつか呼びつけたのは俺だけだ。

「やつこいつお前はずいぶん変わったのな」

なんか表情が優しくなったな。

「……いつまでも沈んでいられないし、いろいろあったのよ」

からつとした明るい表情をする。うむ。

「昔から可愛かつたが、今のほうが断然可愛いぞ」

と思ったことを素直に打ち明ける。

「ほんと!？」

「ホントホント」

3年前です。

「・・・エデム後でお仕置き」

何故に！？

「あ？」の子がオルトちゃん？　はじめて、西九条　灯花です。

「・・・はじめまして。オルト・T・M・立花です」

「かわいい、うちの静流ちゃんと同じくらいかわいいわー！あ、今度あわせてあげる」

そつこつてオルトにくつつく西九条。

ちなみにオルト・T・M・立花のA・Mはタイプ・マーキュリーの  
アド・エデムの駄である。

ちなみに俺も七桜・A・E・立花になつており。A・Eはもぢりん  
アド・エデムの駄である。

#### 閑話休題

「じゃれつくるもいが、違法施設への捜査始めるぞ西九条

「灯花」

「……は？」

「灯花つて呼んで私も七桜つて呼ぶから」

「いや……」

「じ……」

「うひ」

「じ……」

「……灯花」

「うふ 七桜。それじゃ、さつと捕まえちやましょ」

そういうと数人の部下を連れて、施設に入つていった。

「・・・」

俺は隣から来るプレッシシャーに身動きひとつ出来ずにいた。

「・・・ハム?」

「・・・はい」

「帰つたらお仕置きスペシャルだから」

なぜだ。

/

施設をあらかた潰し終えた俺は逮捕やらなんやらは灯花にまかして、ルチアがいるであろう隔離棟へやつてきた。

密閉された部屋の真ん中で女の子が診察台の上に座つている。入ってきた俺を見て驚いているようだ。

「ここにまづ。俺は七桜。七桜・A・E・立花」

警戒させないよつに静かに言つ。

「来ないで！ 私に近づくとみんな死んじゃう……」

俺には見えていたこの部屋に充満したジンが。そしてそれは部屋の中心にいる黒髪の女の子からにじみ出ている。

俺の推測は当たったようだ。千年後の世界とは俺のいた鋼の大地である。そこのある物質と言えばジンしかない。

おれは部屋のジンをすべて魔力に変換していく。そして、彼女に近づきそつと頭を撫でてやる。

「大丈夫。なんたつてお兄さんは千年後から来た人だからね」

そういうて彼女の体内のジンも吸収する。枯渇したジンはしばらくは出てこないだろ？

「ホント？・・・本当に大丈夫なの？」

心配そうに見上げてくる。

「ああ。もうだお兄さんと来ないか？ そりすればもう誰も殺さずにすむよ」

いや、

「IJの言い回しは卑怯だね」

これは俺の本心ではない。俺はこの子をジンの源として見た。そん

な自分がいやになる。

「？」

不思議そうに見上げてくれる。

「本心を言つ。プロジェクトは中止された。君は自由だ。そして俺は俺のためにお前の力が必要だ。見返りにお前の毒は俺が消してやる。俺について来い」

そうこつて手を差し伸べる。

我ながら小学5年くらの子供こいつ當時じやないな。

「・・・・・」

しばらく考えたであらひ少女は俺の手を凝視している。それに問いかける。

「どうする？」

「・・・・・」

するととそつと俺の手を握り返してきた。

「よしー今日からお前はルチア・立花だ 僕のことはパパと呼ぶよ  
うにー！」

「私はオルト。オルト・T・M・立花よ。ママって呼んでくれてい  
いわよ！」

「あ、お前いたんだ。きづか（バキッ グッペラッ！」

いや、マジで気づかなかつたんだつて…」めんなさい…や、やめた  
ブゲラッ！！

「あんたはいつもいつも～～～！」

そんなやり取りを少女は最初こそ呆然と見つめているばかりだった  
が、次第に涙を流しながら笑顔を浮かべるのだった。

予断であるが、お偉いさんが今回の施設閉鎖に文句を言つてきた。  
しかもルチアの身柄を寄せせとまでいつってきたので田の前で眼帯を  
外してやつた。

するとあら不思議。文句言う人が誰もいなくなりましたとさ。

でめたしでめたし。

原作開始まで後6年

続ければいいな。

## 003メートル　自重しませんよ♪（後書き）

お楽しみいただけましたか？

今回は幼女ルチアが登場です。

次回はまだ書いてませんが、静流とか絡ませていきたいです。

ご意見・感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6832v/>

エデムとORTが行く平行世界 第2弾 ~Rewrite編~

2011年8月10日22時15分発行